

心理學と客觀的方法

檜崎 淺太郎

一 疑問

余は今より十二年前、初めて心理學なるものを毎週二時間づつ一ヶ年教つた。其の心理學は今から考へると普通心理學であつた様に思ふが、當時自然現象のみを、主として實驗と觀察とによりて研究して居つた私には、心理學は極めて不確實な學問としか思はれなかつた。然るに其後實驗心理學の講義を聽くに及んで心理學に對する考は一變した。此の心理學では、各種の精神現象が數値又は曲線になつて現れ、ために恰も新しい世界に導かるゝが如く感じ、心理學は余の最も興味多きものとなつた。茲に於て余は何等の疑も起さず、新心理學の進むべき公道は、其の研究にかくの如き客觀法を適用するにありと獨斷した。續いてスクリプチュアの新心理學(1)を精讀して益々この考を深くした。その第一編に於て氏は新心理學の方法を觀

察統計・測定實驗の四項に互りて詳論し更に第五編に至つて心理學の過去及び現在なる題目の下に、新心理學の起源を明にし、古代希臘人の科學と現今の科學との根本的相違は、思辨の建物の基礎たる皮相の觀察に代へるに精緻なる觀察統計測定實驗及數學的演繹の諸法を以てするにあらず(『The fundamental difference between the science of the Greeks and the science of to-day lies in the introduction of methods of careful observation, of statistical calculations, of measurement, of experiment, and of mathematical deduction, in the place of superficial observations as the basis of a fabric of speculation.』)(1)(四三六頁)と論じ、此等の諸方法は生理學・物理學・天文學・統計學・數學等の方面より漸次に發展し來り、各種の自然科學は之が適用に於て偉大の進歩を示した。従つて早晩この世界は此の如き諸法に隨ひて精神現象の研究を要求す(『The world would demand an investigation of the phenomena of mind according to such methods.』)(1)(四四一頁)と論結せざるを得ずと斷じ、かゝる理由により、新心理學は避く可からざる一事件(『The new psychology was an inevitable event.』)(1)(四四一頁)であつたのだと結んで居る。尙氏は之に加へて、新心理學は、只舊心理學の基礎の上に發達したものであるから、其の材料に何等の相違もなく、其の立脚點も變化することなく、又其の目的も衰頹すること無し(『The new psychology is thus merely a development on the

basis of the old; there is no difference in its material, no change in its point of view, and no degeneration in its aims.) (四五三頁)と云ふを讀むに及んで、いよ／＼傳承的な心理學の問題が客觀的に研究し得るといふ余の信念を益々確信するに至つた。又氏は新心理學の全頁數四百九十の中に於て感情を記載すること僅に八頁(1)三〇五—三一二頁感情の心理學の實驗的事實は之で終てであると述べて想像的事實を少しも加へて居ない。この已知の事實と想像的事實とを峻別する新心理學の態度にも深く敬服した。かくして後大學に入學し、正式に普通心理學實驗心理學等を學習し、尙他の多くの精神科學を修めたけれど、余が青年時代に自ら作つた上の獨斷は、已に「イドーラ」となつて居たと見え、何等の啓發を受け得なかつたことは、誠に残念である。加ふるに斯學の權威ヴァント教授が科學的心理學の一方法は實驗的 experimentelle (8)五、及び二三頁ならざる可らずと云つた言葉を自然科學的實驗と同一の意味に誤解して一層余の確信は強くなつた。余が茲に客觀的方法と云ふのは、心的過程を研究するに内觀を用はず、或は之を基本となさずして、内觀に直接に現れない客觀的特徴を觀察或は測定し、その特徴の基礎の上に心的過程の性質を推定せんとする仕方を意味して居るのである。何れ後の項に於て實例につき、其意義を明にする積りであるが、今假にクラ

パレードが心理學の諸方法を分類して居るものにつき(14)二六八頁)余が客觀的方法と云ふのはその何れに當るかを述べて置く。クラパレードは次表の如く、心理學の方法を其のテクニクの見地から量的方法と質的方法とに別ち、其の量的方法の中に心的興奮の度の測定、心的過程の時間の測定、心的作業の力學的測定事實の数の統計を含まして居るが、此等は余の客觀的方法に當るのである。又氏は質的方法の中に主觀的分析と外的表徴の解釋とを含まして居るが、其の後者即ち外的表徴の解釋より心的過程を明にせんとする限りに於て、之も余は客觀的方法の中に加へたいのである。

Point de vue technique.

MÉTHODES QUANTITATIVES (PSYCHOMÉTRIE)				MÉTH. QUALITATIVES (PSYCHOLEXIE)	
La mesure est exprimée en :				La description ou appréciation est fondée sur :	
Degrés de l'Excitant.	Durée du Processus	Travail fourni.	Nombre de sujets.	L'analyse subjective.	Des signes extérieurs.
Psycho-Physique	Ps.-Chronométric.	Ps.-Dynamique.	Ps.-Statistique.	Ps. introspective.	Ps. extrospective.

余は上に述べたる如き意義の客觀的方法を使用して自ら掘り出し得た小な結果に對して無限の興味を過去のある時期に於て感じて居た。然るにかゝる研究的生活の數年後に於て何時となくかゝる客觀的研究方法のみで果して心に接近が出来るだらうかとの疑問が起つて來た。客觀的方法を徹底して利用すればする程精神から遠かる様に思はれて來た。今迄自己の興味を起して居た研究の結果は心に關する知識と如何なる關係があるのかと疑ひ、或時などはこの道は心理學的に自己を自殺の淵に導く様にも感ぜられた。餘り不安に堪えないから余は數年前、心理學讀書會で其の疑問を述べて畏友諸君の示教を乞うたこともあつた。併し現代心理學の傾向から云ふと其の方法は益々客觀化せんとする傾向が強い様に思はれる。尤も心理學者の一部には之と反對の方向に復歸せんとするもの(例へばリップス、テイチェナ、ナトルブ、ザント)もあるが、一般的潮流は客觀的の方面に向つて居ると言ふことが出来る。そして其所にも亦吾人の興味を喚起するに足る幾多の新事實が發見せられて居り、心理學は客觀化せらるゝことに於て生産物が多くなる様にも思はれる。茲に於て益々惑はざるを得ない。併しこの客觀的方法より得たる結果の興味は如何なる興味であるか、又如何なる意味に於て心理學的興味を起し得るか。心

理學はヴェントの所謂生理學的方法を適用するに及びて初めて正確科學となり得たと、自ら信じ、人も許して居る様であるが、これは如何なる意味の心理學であらうか。傳承的心理學問題がこの方法によりてどれだけ明になつたか。若し明かになつたものがありとすれば、それは生理學的方法の輸入から得たものであらうか。或は傳來の内省的方法が其の核となつて居たのではあるまいか。又生理的方法のみで研究し得たものがありとすれば、それは如何なる性質の知識であらうか。かくの如き方法より得た材料から如何なる科學が出来るであらうか。考へ來ると種々の疑問が生ずる。

研究方法の疑問は應て研究の對象の疑問となる。元來心理學は何を研究の對象として居るのか。心とは何であるか、精神現象とは如何なるものであるか。自然現象研究の方法を精神現象にも適用し得ると實驗心理學は吾人に教へるが、然らば精神現象と自然現象とは同一性質のものでなければなるまい。同一性質のものを同一の研究方法で研究して、苟もその結果は自然科學に對立すべき精神科學の基礎學たる心理學が成立すると云はれて居るが、それは如何にして可能なのであらうか。又自然現象と心的現象とは異るとも云ひ得る様であるが、それなら如何に異なるのか。

かくの如くに疑つて來ると、自分の如き小な頭には何も解らなくなる。そこで何かゝる方面に光を與へるものはないかと、文献を探して見ると、所々に散見して居る。余と同じ様に心理學と客觀的方法との關係に就きて、疑問を起し特に之を詳論せられて居る論文もある。例へばフツサール(2)、テイチェナ(3)、ドッヂ(4)等は其の重要なものである。此等の論文のあることを思へば、余の疑問は、亦學界の一疑問かとも思はれる。科學の對象と其の研究法を眞に明に爲すことは、其の科學のみの力では、其の解決が困難であらう。必ずや他の科學、殊に哲學の認識論の力と其の援助に待つことの極めて大なるものがあらう。されどかく常に迷つてのみ居ては進むことも出来なければ退くことも出来ない。のみのみならず心的苦痛に堪えられない。従つて一時的なる對症藥を要する。これ余がこの一小論文を草し識者の御示教を仰がんとする所以である。

余は純粹な心理學的立場を棄て、此等の研究及び其の結果を他の方面から觀ると又他の興味が起る。此等客觀的結果は其の者として頗る興味がある。其の數値その曲線は他の研究からは到底得ることの出来ない一種の特徴を現はして居る。何かある一種の實在を指示して居るに相違ない。余はかく考へてかゝる研究に非

常なるアトラクシヨンを感ずる。余の從來感じ來りし興味はこの方面であつた様に思はれる。

又かゝる研究の結果を基礎に、設定的なる意識作用(現實的ならざる)を生理的或は物理的方面より解釋説明することも出来るであらう。現代心理學の一大傾向は實にかゝる方面に進みつゝあることは、争ふ可らざる事實である。この方面にも余は多くの期待を有して居る。

又之を應用的方面から見れば、極めて重要な研究、重要な結果の様に思はれる。即ち人間を以てある種の目的を達する精神物理的器械と見做し、其の器械の能率の増進の點から見ると、客觀的測定の結果は頗る重要なものとなる。今日精神の實驗的研究が實際社會の各方面と交渉を保つに至つた重なる理由はこの點にあるのであらう。我が國に於ても近來教育軍事、遞信事務並に各種の工場内に於て人間能率の經濟的増進を目的として、實驗心理學的生理學的研究の開始せられ、心理學專攻の士が顧問又は實際の研究者として活動を始めつゝあることは已に讀者の熟知せらるる所である。この方面の研究は實際的效果著しく、實利と結合して將來豫測すべからざる進歩を爲し、其の研究益々隆盛となることと信ずる。従つて又この方面の基

本的研究をある種の心理學の領域に於て徹底的に實行することは、我が國家及び國民の實際的要求から考へて極めて必要なことと信ずる。

されば此等の方面はそれ／＼自己の立脚地を明確にして進みさへすれば何れも極めて大切なる研究であり、人類の知識の擴大に對して大に貢獻するものと信じて居る。従つて余の云ふ客觀的研究法は、將來益々其方法を精緻にし、其の適用の範圍を擴張し、該方法特有の價値を發揮せしめんと欲する點に於ては、客觀的方法尊重の論者と同一である。従つて余もある種の心理學的研究としては、客觀的方法を極端に徹底して行つて見たいと目論で居る位である。かゝる譯であるから以下述べんとする所も、客觀的方法其者の價値を云々するのではない。唯要はある意味の心理學に對する客觀的研究法の交渉する點を考へて見たいのである。此點につきて、讀者の誤解無き様に、豫め願つて置く。

二 心理學の對象

心理學の研究法とそれより得たる結果の意義を考察するに先ち、先づ心理學の對象とは如何なるものであらうか、之を考へて置く必要がある。これはある意味に於

て研究の最後に至つて初めて答へらるゝ問題であらう。されど研究の最初に於て豫め、その對象の性質を誤解しない様にして置かないと、其の研究の方針を誤り遂に無益の岐路に迷ふこともあるからである。

心理學の對象は何であるか、或は如何なるものにするかは、根本的に云はゞ人々の任意であるとも云へる。けれども已に昔から心理學の名稱があり、ほゞ之に一定の對象が與へられて居るとせば、後學者は可成之に準據し、更に新なる對象を研究する際には、新なる科學の名稱を與ふるを以て、學界の混亂を防ぐ便法と信ずる。故に心理學の對象を心理學の歴史に探め、而して其の心理學發達の最初或は中途に於て心理學的ならざる要素の混入せるあらば、之を淨化し、純粹なる對象に精練しなければならぬ。而してこの淨化精練する際には、已に純粹なる對象の存立を豫定して置かねばならぬ。余はこの問題に對し、未だ自分の創見は少しもない。ヴントの晩年の思想中にある心理學の對象(5)(6)(7)フッサールの所謂自然科學的心理學ならざる眞の心理學の對象(2)を以て心理學の眞の對象と信ずるものである。以下かゝる心理學の對象を其の規範として、心理學の歴史にその對象を求めて見たいと思ふ。余は未だ心理學的概念の歴史的發展を自ら原著につきて研究するの餘力を持たな

つたからザントの論理學(5)(一五—一三〇三頁)の材料に據つて、ザントの意見を骨子として考へて見よう。

心理學の對象を、古代の自然哲學から出發した最も舊い朴素的な唯物的心理學に求むると、心を以てあらゆる生命過程を支配する原理 *Princip* となし、心は生活體と同様な一種の物的實體 *materielle Substanz* であると答へる。ザントは之を心理學の純粹唯物主義と名けて居るが、かゝる見方は、近代の心理學では、其の跡を絶つたと見て差支へない様であるが、今日でも生理學者の中には、上の如き見方で心を見んとする者があるやうである。即ち精神現象とは大脳の分子運動をその運動の現實の儘に於てではなく總合印象として、恰も吾人が水滴の集合を雲として知覺する如くに知覺したものであると考へる。この考へ方は精神現象を大脳の分子運動から導き出さんとし、而して之を導き出す前に已に一種の精神現象を許して居る。換言せば、感官知覺に類する一種の知覺によりて、恰も外的刺戟を感覺知覺が知覺する如くに、大脳内部の分子運動を概括的に知覺し得るとを許して居る。然らばこの分子運動を知覺する一種の内的知覺は如何にして生ずるか、この問題が解けなければ、矢張精神現象の物質的説明は徹底することが出来ない。大脳内部に分子運動のあること

と、其の知覺とは別なことである。これを説明するために分子運動其の物が自己を知覺するとすればヴントの言つた如く、それは大脳の分子が其の運動を感覺する性質があるといふと同一義となる。果してかく解するならば、已にこの見解は純唯物主義を捨て、精神物理的唯物主義に變じて居るのである。精神物理的唯物主義の心理學によれば、心的基本現象は到底物的過程から如何なる方法に於ても説明することの出来ないものであることを前提とする。そしてこの基本的現象としては、簡單感覺の如きものを考へ、この簡單感覺は吾人の説明し能はざる方法に於て神經の興奮と結合して居ると假定するのである。夫故に簡單感覺を生理學的の言葉で言ひ表はすと、ある神經要素の分子運動と言ふことが出来る。而してあらゆる複雑なる心的過程は單一なる感覺の結合から生ずると見做して、その感覺の結合の基礎を大脳の生理的過程の結合に求めるのである。夫故に精神過程の全體の結合は、この生理的結合及其の相互作用からのみ解説が可能となる譯である。この見解から見ると心理學の問題は二つとなり一は、心理學的問題であつて、感官及び神經器官の生理的作用を營む際に觀察することの出来る感覺の記載を其の任務とする。二は生理學的問題であつて、この方面に於ては、生理作用の結合の事實を手掛りとして感覺

から如何にして複雑なる心的過程が成立するかを因果的に説明せんとするのである。この第二の問題は心理學特有の問題の一切を抱括するから、此の見解から出發すると、心理學は感官及び神經系統の生理學の一部の内に吸収せらるゝこととなり、従つて純心理學の問題としては感覺のみが残されることとなる。感覺から複雑なる精神過程が如何にして生ずるかを説明するとは、心理學の問題としては頗る重要であつて、又頗る困難な問題である。精神物理主義の唯物的心理學が、之が解決を生理作用の結合に求めんとした努力に對しては、多大の敬意を表したいが、併し其の假定に難點がある。この種の心理學は物的なるものから、心的なるものが導き出されると考へて居る。されども心的結合が物的結合と全く異つて居り且又相互に比較することの不可能なことは、恰も單一感覺が大脳の分子運動と全然相違し、且つ互に比較することが出来ないのと全く同一である。この種の心理學は感覺だけは如何なる方法でも生理的作用から説明が出来ないと斷定しながら、其の感覺の結合及び其の結合から生じた複雑なる心的過程は生理作用から説明が付くと主張するので、單一なる心的過程に於て否定したものを複雑なるものに對しては肯定して居るが、之は自家撞着であらう。して見れば、心の本質を物的方向に求めんとする試みは、何

れも心の本質を消滅せしむるものであると云はねばならぬ。

物的方向即ち外的方向に向つて心の本質が求め得られないとすれば、吾人は必ずや内的方向即ち心理的經驗其の者の内に之を求めなければならぬ。心理的經驗の中でも論理的活動は最も明瞭であり、且他の精神過程と區別が爲し易いから、この論理的活動は特殊の精神過程として他の心的過程から分離せられた。そしてこの知的活動を細かに分析した結果、遂に觀念を以てあらゆる複雑なる過程の根柢に存在せる主要なる要素となした。之が主智的心理學の起源であり又之が能力心理學ともなるのである。かゝる見解に達すると、複雑なる過程も一種の觀念結合と見らるるから、此結合の基本形式を求めて遂に聯想心理學が起り、自然科學の因果關係研究の例に習つて、この觀念結合の力學的法則を探求せんと試みたのが觀念力學說の心理學 *Die Psychologie des Vorstellungsmechanismus* である。能力聯想兩心理學共通の誤謬は觀念の不變を肯定したる點に存し、觀念力學說は更に之を高潮して觀念の不變不滅を説き、力の概念を加へて他の精神過程は其副産物となり、茲に於て智的心理學は其の極點に到達した。物其の極に達すれば、其の弱點も亦最も明白に現はれる。智的心理學が猶能力心理學聯想心理學の時代に於ては、その缺點も左程顯著に現れな

つたが、ヘルバルトの觀念力學說となると、其の説く所餘りに日常の心的經驗と相反し、其の弱點一時に爆露せられて、遂に主意的心理學の驍將ゲントによつて、粉碎せられたことは言ふを要せぬ。主智的心理學に於ては精神過程中の觀念のみ實在性を有し、他の感情意志は副次的現象に過ぎなかつたが、主意的心理學に至りて初めて、あらゆる精神過程は各其の實在性を得、心理學上に於ける各精神過程はゲントに至つて復活したと言つても過言ではあるまい。

以上述べ來つた心の本質に關する諸學者の意見も、之を大別すれば二種となる、其の一は精神の實體的觀念であつて、他は現實的觀念である。前者は精神的事實をある假定的實體の表現と見做し、後者は精神を他の實體の表現と見ずして、精神生活其の者の中に直接に與へられたるものを直に精神と見做すのである。現實なるもの即ち精神なりとなすのである。古代に於ては兩者は明に分離して居なかつたが、漸次其の區別が明となりデモクリットの精神と名けたるものは、ある實體の表現したものであつて、アリストートルの生活原理たる精神は現實的のものであつた。近世哲學に於て精神の本質を實體に求めたる先驅者はデカルトであることは言ふ迄もない。デモクリットにありては精神は運動性を有するアトムでありとし、デカルト

は精神は延長を有せないが而し空間に定位せるものであるとした。分つことの出来ない空間的實體たる點に於て、デカルトの精神もアトム概念を保留して居る。けれど其のアトムには思惟の屬性が賦與せられて居る點で、物的實體と異つて居る。されどもこの精神的實體は物的實體との關係に於て、又一種の物的性質を豫想して居る。即ちこの精神的實體は大脳の松果腺に於て物的實體と機械的なる相關々係を保つて居る。即ち常に機械的關係のみを有する物的實體に機械的關係を保ち得る點に於て、精神は猶物的性質を有して居る。本來物的なるものを精神化する場合には、矢張幾分物的なるものゝ痕跡を止むるのは、避け難き自然の結果であらふ。然るにライブニッツは有延長無意識の實體と無延長有意識の實體とを想定せるデカルトの二元論に反對し、精神にその精神的特徴を完全に附與せんと試みて、モナドの概念に達し意識の根柢を力に求め、非物質的にして心的なる一種の實體を想定するに至つた。ライブニッツ以後の新心理學の見解の殆どすべては、このモナドの概念を其の儘に用ひて居ると見られる。唯心的なる根本思想を徹底さすと、物質なるものは、吾人の意識の構成したる概念なることを知るに至るのである。それにも係らず、人は知らず識らず意識其の者を、物質的現象を反省し統一して作つた所の一種の

概念たる實體と結びつけて考へる様になる。ヘルバルトが意識の本質を變化しない、従つて發達の全然不可能な觀念と見たのは、恐く物質恒常の概念から生じたものであらう。従つて不變化的な精神的實體の背後には、常に物質恒常の原理が潛んで居る。物質恒常の原理は自然現象を理解する上には重要な働きを有するが之を精神生活に適用すると精神現象は發達の不可能な機械論的なものに變化する。夫故に實體説 *Substanztheorie* は精神的事變の説明に對しては、その精神的特徴を滅却するより他にその效力を有せない様に思はれる。ヘルバルトは形而上學的基本概念を心的經驗の學說に適用せんと試みたる唯一の人であつて、氏は觀念を説明して單一なる實體の障害なりとし感情は觀念の禁止及びその禁止の解除なりと説いた。されどかゝる説明の內的必然或は充分なる經驗的證明は全く之を缺いて居る。ヘルバルトの心理學に於て記述して居る所の精神過程の *メカニク* *Mechanik* は現實の心的出來事とは、全然關係のない想像上の *メカニク* に成つてしまつた。従つてヘルバルトの後繼者に於ては、このヘルバルトの實體的理念は漸次に經驗界から遠かり遂に形而上的な一種の飾物となつてしまつた様である。而して心理學の方面にありては、人々が心的經驗の奥底に深入りして考ふるに至ると、この實體的理念

の存在は到底許すことが出来なくなり、遂に心理學から排除せらるゝに至つた。然らば吾人は心理學發達の歴史の上から、精神をある種の實體と見る見解を放棄せねばなるまい。

精神をある種の實體なりと爲す思想を排斥し、精神を以て最も現實的・活動的なものと見る見解之を精神の現實活動説 *Die Theorie der Aktualität* と云ふのである。精神の現實活動説の見解によれば、各種の心的内容は一つの過程 *Vorgang* 即ち *Aktus* であり且つ吾人の直接の内的體驗内には、自然科學が其の學の領域内にて假定するが如き恒常なる對象 *konstante Objekte* は有り得ないと主張するのである(7)(九二頁)。

此の精神の現實活動説は其の發達を久しく妨害せられて居つたらしい。希臘の哲學者中第一に精神と身體とを分離し、精神を以て身體を司配する原理と爲したるはプラトーンであらう。アリストートルは精神を以て物質を活動せしめ之を形成する原理と見做し、精神は總べての有機的形體を創造すること、恰も彫刻家が大理石を刻むが如しと論じ、其の發育營養・休息・運動に至るまで盡く心的勢力の直接の作用なりと考へ生命 *Life* と心性 *Mentality* とは、彼に於ては同一語となり、従つて精神を以て生命の原理となした。して見れば已に古代に此の思想の萌芽はある様であるから、

以來此の説は久しく實體説に壓倒せられて居たのであらう。プラトイ、アリストイトルの思想より、今日のヴント或はフッサールの有するが如き精神の現實活動の思想に達するまでには、如何なる變遷を經來りたるか、歴史的興味のある問題であるが、自分は之につきては何等の知識も持たない。

精神の現實活動説は物的因果律とは其の特性を異にせる心的因果律と密接に結合して居る。物的因果律は實體の概念と結合し、自然科学の最後の説明はこの想定の實體相互の關係に於て解からるゝものと爲す。従つて自然現象の個々の因果的説明は概念的特徴を有する。然るに心的因果律は心的過程と常に結合し、かつ其の結合の様は心的過程が直接に知覺に現はるゝ如くに親密である。従つて心的因果律は心的過程が直觀的なると等しく又直觀的である。心的過程の説明にその心的過程とは全く異なる實體の概念は無効である。心理學に於ては直觀に與へられたる事變の結合の中に、因果概念を思考によつて見出さんとするのである。自然科学の客觀的見地に從へば、認識主觀の直觀から離れたる形式の中に因果的結合を求めんとするのであるから、因果律は事實の客觀的基礎を與へると同時に亦實體の概念に移り行かねばならぬ。之に反し心理學は内觀的見地に立つが故に、其の心的因果律

は直觀的具體的とならねばならぬ。

心的過程の考察に於ては、その過程は常に變化的のものとするも、其の過程の素質 *Anlage* を考察するに至ると、ある不變化的な實體的根柢を想定する様になる。ウォルフの能力心理説、ヘルバルトの觀念力學説も亦かゝる傾向を示して居る。けれども精神の現實活動性より出發するものは、心的素質 *Psychischen Anlagen* 其の者も流動的變化的なるものと考へねばならぬ。換言せばこの心的素質も新しき心的原因の作用によりて絶えず變化することを認めねばならぬと、ヴントは云つて居る。ヴントが精神現象の實體説を排して現實活動性を高潮しながら、猶氏が心的素質を認むる點に於て、氏は實體説に陥るものと批難せられて居るが之れは當然ヴントの甘受しなければならぬ批難であらう。余はこのヴントの心的素質の概念も心的過程の概念から除きたい様に思ふ。心理的の經驗内容を概念的に整理する際に自然科學的觀察法を心理學に誤用してはならぬ。この誤用が特に心理學的實體概念を作る際に行はれて居る。即ちそれは物質的實體概念を心的領域に輸入することである。上にも述べた様に、心的過程の單なる分類から得たる類概念を、直に精神の原始的の性質なりとなす能力心理學は其の一例である。プラトールによりて區別せられたる

觀念感情努力の三性質を、能力心理學は始ど其儘に用ひた。そして此等の心的過程は互に獨立に存在せるものとなした點は、實體の學說と密接に結合して居る。そして之れが獨立的のものとなると、之から他の過程を誘出せんと試みるは、自然の勢である。而して主智的心理學は之を徹底的に遂行した。従つて其の結果は實際の心的經驗とは全く飛び離れたる觀念の世界を建設した。自然科学はこの進み方で宜いのであらうが、心理學の任務は之ではあるまい。自然科学の目的は客觀的實在を矛盾なき概念にて構成すれば、達せらるゝのであらうが、心理學の目的は内的知覺に直接に與へられ事實を分析し或は結合し、そして若し可能ならば、心的因果を發見せんと欲するのであらう。故に若し心理學に主智的心理學が爲した如き演繹法を用ひるならば、心的體驗の重要なる部分に壓迫せられ、或は實際の心的過程とは異なる想定上の假定を作るに過ぎないであらう。

精神を現實的なるものと見る見地に於ては、吾人に直接に與へられたる實在は精神過程であり、物的世界の概念は思惟の產物である。精神過程はそれがあるが如く直接に存在して居る。そしてこの精神過程はそれ自身で一の統一あるものであり、それ自身で存立して居るものであつて、他の者に依つて存して居るものではないと

ヴァントは云つて居る。西田博士はこの事實を次の如く明白に言ひ現はされて居る。意識現象に於ては統一作用の外に統一者があるのではない、働きの外に働くものがあるのではない、働くものなき働きである、働きの働きの自身を維持するのである。(9) (一一頁)。フッサールも亦た心の特徴を論じて云ふには、心的範圍に於ては、現象と有との間に何等の差別も無し (keinen Unterschied zwischen Erscheinung und Sein) (2) (三一二頁) と云ひ、又心的のものは去來する現象であつて、何等の不變的なる有でなく、又其のまゝ直に自然科学的の意味で客觀的に規定し得らるゝ有を保持しないことを、次の如くに言ひ表はして居る。Ein Psychisches, ein \rightarrow Phänomen \llcorner kommt und geht, es bewahrt kein bleibendes, identisches Sein, das als solches im naturwissenschaftlichen Sinn objektiv bestimmbar wäre, z. B. als objektiv teilbar in Komponenten, im eigentlichen Sinne \rightarrow analysierbar \llcorner (6) (一一二頁)。又心的のものは他に支持者を要せざること、『心的のものは反省によつて監視した體驗である、そして自分自身によつて自分自身として現はれ、絶對の流れとして現はれる云々』(es ist \rightarrow Erlebnis \llcorner and in der Reflexion erschantes Erlebnis, erscheint als selbst durch sich selbst, in einem absoluten Fluss, ……) (2) (一一一—一一三頁)。と説きて居る。

心理現象の流れるのを内的に視るならば現象は現象へと漸次に移つて行つて決

して現象以外のものに行かない。其の現象の現はれるも外界の刺戟から現はれるのではなくて、むしろ暗黒から幽靈の現はれるに似て居る。又其の消え去るのも過去の中に暗黒の内に沈んで行く。吾人はそれが何れから來り、何れに去るか、を明に捕へることが出来ない。それを明に捕へたと思つた時は、已に心ではなく物を或は自然を捕へて居るのである。

斯の如き絶對の流れに抽象的思惟を加へて、ある見地の下に其の流れを部分に分ち、その各を感覺觀念感情意志等と名づけるが、これは唯抽象的思考の結果である。心的過程其の者は依然として統一的心的體驗としてあるが、まゝに存立して居るのである。故に若しこの實在的體驗から其の一成分すら除去せんと努むる時は、全體の破碎を免れないのである。然るに稍もすれば、人は客觀的自然觀察の見地と主觀的精神觀察の見地とを混同し、精神の現實活動性を看過するのである。自然の觀察に於ては、吾人は全心的體驗から觀念の對象を分離し、この對象は心的體驗とは全然獨立の者と考へる。之は自然觀察の方向に於ては至當である。所が人はこの觀念の對象の客觀的意義を、體驗としての觀念の上に移して、觀念其の者も他の心的過程と獨立に存在せる、或は他の心的内容と分離することの出来る複合體であると考へ

851
 違ひをなすに至るのである。かゝる筆法で以て、他の心的過程を觀念から分離し、更に相互の分離にまで導くのである。觀念力學説が不變不滅と斷定した觀念も、其の實際に於いては流動的なものであつて、唯比較的に他の心的過程よりも少しく固定性が強いのみである。従つて明晰なる觀念も直に消滅し、又現出せる間に於ても、その質は他の心的要素との關係に於て、各瞬間毎に變化しつゝあるのである。唯觀念が客觀性を有する様に思はるゝのは、本來各心的體驗にはある二種の方面があるからである (jedes psychische Erlebniss ein doppelte Seite hat) (5) (二六四頁)。即ちその一方は心的内容の客觀化の方面であつて、觀念が之に應じ、觀念は觀念の對象と對應する。他の一方は主觀化の方面であつて、感情が之に應ずる。現實の心的過程にありては、常にこの兩面が存して居り、従つて觀念を離れた感情意志もなければ、觀念は感情を離れて獨立に存することも出来ない。そして此等は常に融合して統一を保つて居る。而してこの全融合を一の統一的概念に固定せんと欲することは、拒むべからざる心理學的要求なりと斷じて、ヴァントはライブニッツ哲學の統覺の概念を借り來つて其の統一の基礎として居る (5) (六六頁)。

古代より今日に至るまで心理學が唯物的哲學並に自然科學より受けたる不純的

要素を、精神の概念から綺麗に洗ひ去つて眞の精神即ち純粹なる精神として見ると、最初の所與は、既にフイヒテの觀破した如く純粹の事行である。心理學はこの事行を思考の上で固定して研究の對象となし、その對象があるがまゝに理解せんとし、この際にあらゆる實體的概念を排除し、精神現象は己れ自らにて實在し常に動的状態にあるものとして之れを理解せんと欲するのである。心理學は事行を思考の上で固定して研究の對象となすも、之れがために其の對象の性質を固定的なるものと見るのではない。その本質は元來事行であるから、流動的である。従つて精神現象は精神過程である。過程とは己れ自らの力にて働く現實の活動 (Aktus) を意味する。

精神現象を精神過程即ち現實せる活動状態と解し其の背後に何等の支持者を許さないならば、精神なる語も遂に大なる意味を持ち得ない筈である。従つてセントは精神の概念を實體的統一の意義に用ひず、論理的統一の意義に解して居る。即ちあらゆる外的經驗の主體が物質なると等しく、あらゆる内的經驗の主體が即ち精神である。心理學はすべての觀念活動感情活動意志活動を内的體驗其の者の實在として會得する (die Psychologie alles Vorstellens, Fühlens und Wollens als die Wirklichkeit des inneren Erlebens selbst auffasst.) (5)(1147)。自然科学は認識主觀から離れて獨立に考へられた客

觀世界の矛盾なき説明を成し遂げるために感覺的現象から推定し得たる實體を考へ、この實體の恒常性を借りるのであるが、心理學は之に反し、經驗に與へられた心的體驗を説明するに、心的體驗特有の實在より何等他の者を要せないとヴントは論定して居る。余は上來心理學の對象の如何なるものなるかを歴史的に考察した。尙この心理學の對象を明ならしむるために、自然科學の對象と如何に異なるかにつき考へて見たい。各種の學問の境界を明にすることは、認識論の貴き職分であらう、從つてこの兩科學の對象の相違に就きても、認識論の深刻なる考察に示教を仰がなければならぬが、茲には前の如くに定めた心理學の對象と一般に考へられて居る自然科學の對象とを比較して見る。此の問題につきてもヴントの見解(7)三四〇—三五〇頁)に同意し、氏の見解の基礎の上に考察を進めて行く。

余は今余の前に在る松樹を知覺したとする。この體驗に何等の反省又は二次的な概念的區別を爲さず與へられたる或は生起したる原始的な直接經驗につき見て見ると、この知覺に與へられた松樹の觀念の對象が一定の空間にある者として現はれる。この知覺せられた松樹の觀念の對象は、やがて心的とも物的とも成り得るものである。植物學者はこの個體的松樹に於て一般的なる松樹を見て、其の特徴を研究

し物理學者はこの松樹を因縁として其の背後に潛み居る眞の物理學的對象を研究する。従つて自然科學者に對しては松樹の感覺又は觀念は、ヴントの云ふ如く自然科學的對象の附號 *Zeichen* に過ぎない、所が心理學者に對してはこの松樹の觀念の對象が眞の實在となつて現れ、これがやがて心理學的對象となるのである。夫故に原始的直接經驗に於ける觀念對象 *Vorstellungsobjekt* は心理學的のものでもなければ、自然科學的の者でもない、而して其の何れにもなり得るものであると、ヴントも云つて居る。(7)(三四四頁)。

然らばこの原始的經驗の觀念の對象 *Gegenstände* が如何にして自然科學の對象となり或は心理學の對象になるであらか。原始的經驗に於ける觀念對象は、表象する自我即客觀に對立する主觀の存立を要せずして成立し得るものである。所がこの具體的直接的狀態が抽象的間接的方向に一步を進めると、觀念對象から主觀が分裂する。觀念對象から主觀が區別せらるゝと同時に觀念對象は客觀的對象 *Objekte* として會得せられ、主觀と全然獨立せる實在として主觀に對立して現れる。松樹の知覺の例を今一度引くと、松樹が經驗の最初に現れた時は、如何なる規定も受けな純なる體驗であるが、暫時にして、この樹は何の樹だらうと思考すれば、直に主觀から

離れた客觀的對象と變化する。この客觀的對象其の者を主觀から分離し、主觀と無關係に考察すると、茲に自然科學の問題が成立する。ナトルプが自然科學は客觀化の方面であると云ふのも、この自然科學の對象の成立する際の方向から云つたのであると解することも出來よう。之に反し心理學の對象はこの自然科學とは全然反對の方向に進んで初めて成立する。即ち原始的觀念對象を主觀の知覺内容として會得すると、これが心理學の對象となる。フッサールが *in der Reflexion erschantes Erlebnis* と云ふのもこの意であらう。而して此の知覺内容が如何なるものであるか又それが他の知覺内容と如何なる關係があるか、此等が心理學の問題となるのである。觀念對象其の者を最も具體的直接的なるものとすれば、心理學的對象は之に對し抽象的間接的なものである。この點に於ては自然科學・心理學の兩對象は同一の關係であるけれども、而し同じく抽象的間接的であるとは云へ、前者は客觀の方に進み、後者は主觀と結合せんとするのである。ある學者が心理學を主觀化の方向の學と云つたのも、恐く心理學的對象の成立の方向から名けたのであらう。心理學の對象が主觀の知覺内容たる點に於て、心理學の對象が主觀的なものであり、又直接的なものとなるのである。ザントは心理學を直接經驗の學と云つて居るが、併しザントもこの

直接經驗を主觀客觀の分立しない前の原始的な純粹經驗を意味して居るのではない。この原始的經驗を主觀客觀の對立後に於て主觀と關係せしめたその經驗を意味して居るので、一種の間接經驗である(7)(三四四頁)。けれど自然科学の對象たる所謂間接經驗と區別すれば、遙かに純粹經驗の方向に接近して居るから、之を自然科学の經驗と區別するために、絶對的ならざる比較的の意に於て直接經驗と云つたものと解するのがヴェントの認識論と一致する様に思ふ。元來心理的對象も、自然科学的對象も本來異なる經驗内容ではない、經驗は無二唯一である。自然科学・心理學はその唯一の經驗を異なる見地から眺めたのである。異なる見地に對して、異なる對象が現るのである。故に異なる見地に立つた後では、其の研究の對象も異ると云ひ得る。而し對象が異るとも對象の依つて生じたる經驗は同一である。心理學はこの唯一の經驗を二次的主觀と關係さして觀察して行くのである。夫故にヴェントは心理學の任務を次の如くに言ひ現はして居る。 Allgemein aber hat diese die Analyse der Erfahrung in ihrer unmittelbaren Beschaffenheit, in ihrem ganzen Umfange und zugleich mit Rücksicht auf ihre Entstehungsweise in dem Subjekt zu ihrer Aufgabe. (7)(三四七頁)。

ヴェントが自然科学に對立すべき精神科學を建設せんとし其の精神科學の基礎と

しての心理學を樹立せんだために、心理學的概念に混入せる自然哲學・自然科學の概念を除去することに十全の力を盡し、進んで心的現實活動の原理 *Das Princip der psychischen Actualität* を完成して心的なるものと物的なるものとの觀察法の異なる點を明にし、茲には述べなかつたが氏は更に進んで物的因果と心的因果なるもの、獨立性を確實にし、心理現象に心的因果の存在(多くの異論ありとするも)を高潮したのは、實に心理學のために萬丈の氣を吐きたるものであつて、ヴントはある意味に於て眞の意味の心理學の建設者と云ひ得るであらう。特に心的現實活動の原理は、其の起源を求むれば既にプラト、アリスト、トルに逆か上り得るであらうが、かくの如く明晰に詳細に論定したのは、心理學史上に於けるヴントの一大功績である。余は精神過程をこの心的現實活動の原理の上に成立せるものとせる、ヴントの見解に全然同感である。而してこの精神過程には物的因果と全然或は幾分其趣きを異にせるある種の心的因果の存在せることをも信ずるものである。其の因果の性質が統制原的理であるか或は構成的原理であるかは、今茲に深く追究するの要は無い。

(1) Scripture, E. W. *The New Psychology*. 1897.

(2) Husserl, E. *Philosophie als strenge Wissenschaft*. Logos B. I. 1610-11.

(3) Titchener, E. B. *Prolegomena to a Study of Introspection*. Amer. Journal of Psy. Vol. 23; 427-448. 1912.

- (4) Dodge, R. The Theory and Limitations of Introspection. Amer. Journal of Psychology. Vol. 23; 214-223, 1912.
- (5) Wundt, W. Logik; B. II; 1. 1895.
- (6) Wundt, W. Grundriss der Psychologie.
- (7) Wundt, W. Kleine Schriften B. II. 1911. 1905
- (8) Wundt, W. Physiologische Psychologie; B. I. 1908.
- (9) 畑田幾多郎博士 意識と其の意義について 哲學研究 第二十二號 大正七年一月。
- (14) Chapardé, Em. Psychologie de l'Enfant et Pédagogie expérimentale. 1916.